

彦根市埋蔵文化財調査報告書第 90 集

彦根市内遺跡発掘調査報告書

須川遺跡第 6 次・第 9 次

丁田遺跡第 9 次・第 11 次

福満遺跡第 21 次・第 22 次

令和 6 年 3 月

彦根市

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会文化財部文化財課（平成31年4月～彦根市市長直轄組織文化財課、令和2年4月～彦根市歴史まちづくり部文化財課）が、平成28年度、平成29年度、令和2年度に国庫補助および県費補助対象事業として実施した市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課（平成31年4月～彦根市市長直轄組織文化財課、令和2年4月～彦根市歴史まちづくり部文化財課）が実施した。整理調査は彦根市観光文化戦略部文化財課（令和5年4月～）が実施し、調査体制は下記のとおりである。

平成28年度（現地調査：丁田遺跡第9次、須川遺跡第6次、福満遺跡第21次、第22次）

彦根市教育委員会教育長：善住喜太郎

文化財部長：馬場孝雄

文化財課長：稲野善行

文化財係長：三尾次郎

主査：戸塚洋輔

主任：下高大輔

臨時職員：沖田陽一

文化財部次長：広瀬清隆

課長補佐兼管理係長：草川高章

主査：林 昭男

副主査：田中良輔

臨時職員：堀田佳典

平成29年度（現地調査：須川遺跡第9次）

彦根市教育委員会教育長：善住喜太郎

文化財部長：馬場孝雄

文化財課長：稲野善行

文化財係長：三尾次郎

主査：戸塚洋輔

主任：下高大輔

臨時職員：沖田陽一

文化財部次長：広瀬清隆

課長補佐兼管理係長：北坂 崇

主査：林 昭男

副主査：田中良輔

臨時職員：堀田佳典

令和2年度（現地調査：丁田遺跡第11次）

彦根市長：大久保貴

歴史まちづくり部長：広瀬清隆

副参事兼文化財課長：松宮智之

文化財係長：三尾次郎

主査：戸塚洋輔

技師：内藤 京

会計年度任用職員：沖田陽一

会計年度任用職員：阿部春香

会計年度任用職員：小野直子

会計年度任用職員：豊村たまき

歴史まちづくり部次長：久保達彦

課長補佐兼管理係長：牧田 歩

主査：林 昭男

主査：田中良輔

会計年度任用職員：樋口杏奈

会計年度任用職員：岡田ひとみ

会計年度任用職員：久保亮二

令和5年度（整理調査・報告書刊行）

彦根市長：和田裕行

観光文化戦略部長：久保達彦

観光文化戦略部次長：山岸将郎

観光文化戦略部副参事兼文化財課長：井伊岳夫

課長補佐兼管理係長：西崎和則

副主幹兼文化財係長：林 昭男

副主幹：戸塚洋輔

副主幹：田中良輔

主任：内藤 京

技師：川村峻太

会計年度任用職員：宮崎幹也

会計年度任用職員：樋口杏奈

会計年度任用職員：岡田ひとみ

会計年度任用職員：小野直子

会計年度任用職員：久保亮二

会計年度任用職員：佐藤利江

会計年度任用職員：春名英行

3. 本書で報告した各調査の調査担当者及各章の執筆者は下記のとおりである。

本書の編集は田中が行った。

第1章 丁田遺跡（第9次） 調査担当者：田中 執筆者：田中

第2章 須川遺跡（第6次） 調査担当者：田中 執筆者：田中

第3章 福満遺跡（第21次） 調査担当者：田中 執筆者：田中

第4章 福満遺跡（第22次） 調査担当者：田中 執筆者：田中

第5章 須川遺跡（第9次） 調査担当者：林 執筆者：林

第6章 丁田遺跡（第11次） 調査担当者：林 執筆者：林

4. 本書で使用した遺構実測図は、沖田、久保、林、田中が作成し、遺物実測図については、宮崎、樋口が作成した。遺構・遺物の写真撮影は、各調査担当者が行った。

5. 本書で使用した方位は、平面直角座標第VI系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

6. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。

7. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。

弥生土器・土師器 須恵器

目次

例言

第1章 丁田遺跡（第9次）

1 遺跡の概要	1
2 調査経過	2
3 調査成果	2
4 総括	3

第2章 須川遺跡（第6次）

1 遺跡の概要	6
2 調査経過	7
3 調査成果	7
4 総括	8

第3章 福満遺跡（第21次）

1 遺跡の概要	11
2 調査経過	13
3 調査成果	13
4 総括	13

第4章 福満遺跡（第22次）

1 遺跡の概要	15
2 調査経過	16
3 調査成果	17
4 総括	17

第5章 須川遺跡（第9次）

1 遺跡の概要	19
2 調査経過	19
3 調査成果	20
4 総括	23

第6章 丁田遺跡（第11次）

1 遺跡の概要	32
2 調査経過	34
3 調査成果	34
4 総括	34

報告書抄録

第1章 丁田遺跡（第9次）

1 遺跡の概要

丁田遺跡は、彦根市高宮町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。調査地が所在する高宮町一帯は、彦根市北部の犬上川右岸に位置しており、遺跡の北西方向には古代寺院・官衙跡として知られる竹ヶ鼻廃寺遺跡が所在している。

丁田遺跡については、主として縄文時代中期末および、奈良時代末から平安時代初頭頃の集落跡として知られている。宅地造成工事に伴い実施した第2次調査では、縄文時代中期末の埋設土器の内部から翡翠大珠が出土しており、当該期における湖東北部地域と翡翠の原産地である北陸地域との物流を考えるうえで、貴重な資料となっている。また、同調査では8世紀後半頃の掘立柱建物や柵列などが整然と立ち並ぶ状況が明らかとなっており、個人住宅建設工事に伴って実施した第4次調査では、同じく8世紀代の鍛冶工房であったと推定される隅丸長形状の竪穴建物が検出されている。この竪穴建物の内部からは鞆羽口や鉄滓、鉄釘などの鍛冶関連遺物が出土しており、竹ヶ鼻廃寺遺跡の存在と併せて、官衙に関連する施設の存在がうかがわれる。また、これら調査区の西側では、宅地造成工事に伴う第5次調査として、縄文時代中期末の屋外炉や平安時代の竪穴建物などが検出されている。

今回報告する第9次調査は、この第5次調査時の造成地内に位置することから、縄文時代および古代の遺構、遺物の検出が想定されていた。



図1 調査地点位置図



図2 遺構配置図

2 調査経過

今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴う文化財保護法第93条の届出および調査依頼に基づくものであり、宅地造成時の試掘調査結果に基づき、地盤改良工事の影響を受ける建物部分を調査区として、平成28年9月12日から同年9月30日にかけて調査を行った。調査地は第5次調査時の造成地内に位置し、当該調査に伴い掘削を行った造成地中央の道路部分と、南側擁壁部分との間に挟まれた宅地部分に該当する。彦根市高宮町字辻ヶ内1388番21号に位置し、調査面積は敷地面積約190.72㎡のうち、建物部分約124㎡である。調査はバックホーにより表土の掘削を行った後に、人力掘削によって遺構の検出および掘削を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の層序としては、上層から灰褐色砂礫土層（現代造成土層）、灰色粘質土層（近現代の耕作土層）、明黄褐色砂質土層となっている。このうち明黄褐色砂質土層の上面において遺構検出を行ったところ、現地表面約 -100 cmの深度において竪穴建物等の各遺構を検出した。

（2）遺構と遺物

調査の結果、遺構としては竪穴建物1棟、溝4条、小穴群を確認した。遺物については須恵器小片が出土しているが、年代の特定が可能なものは見られない。以下、詳細を述べる。

竪穴建物 SH01 は、調査区内において長さ約 1.5m × 幅約 0.9m を測る。遺物は出土しておらず構築年代は不明である。隣接する第5次調査区では、縄文時代中期末の竪穴建物や、平安時代の竪穴建物などが検出されているが、この遺構については埋土が地山層と見紛うほどに同質化が進んでいる点から、古代のものではなく、縄文時代の遺構と推定される。

溝4条については、中世以降の耕作溝と考えられ、現在の条里地割に概ね並行する。埋土中から須恵器小片が出土しているが、本来的にこの遺構に伴うものとは考えにくく、耕作の作業に伴い混入したものと思われる。

小穴群については73基を検出しているが、明確に組み合わせを判別できるものは見られない。いずれも不整形ないし隅丸方形の平面形状を呈しており、規模としては、最大で長軸約 68 cm × 短軸 56 cm 程度、最小で長軸約 13 cm × 短軸約 12 cm 程度を測る。

4 総括

今回の調査では、縄文時代中期末と推定される竪穴建物、中世以降のものと推定される耕作溝、小穴群などを検出した。今回の調査区は丁田遺跡第5次調査時の造成地内に位置していることから、同調査時に検出した縄文時代および古代、中世の各時期にわたる遺構群と関連するものと思われる。

第5次調査時における遺構の分布では、造成地南端の擁壁設置部分においては縄文時代中期末の遺構や遺物が集中して検出されており、造成地中央の道路部分では中世および平安時代の遺構群が多く見られた。今回の調査地点はその中間、宅地部分に位置することから、両時期の遺構が検出されており、南北方向で徐々に遺構の年代が遷移していく様子が理解される。

ここで見られるように各時期の遺構分布がずれている理由については、中世以降の耕作地の拡大に伴い、地形改変の影響を受けている可能性が高い。丁田遺跡の南部には犬上川旧流路によって形成された谷地形が存在しており、本来的に北から南へ向かって落ち込んでいく地形となっている。こうした斜面地の開墾にあたっては、標高の低い地点では盛土、高い地点では切土によって平坦地を確保しているものと考えられ、遺構分布を考察するうえでは、本来的には北側にも存在していた縄文時代の遺構が、削平によって消失した可能性についても留意しておきたい。

参考文献

- 彦根市教育委員会 2016『丁田遺跡第5次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第67集
彦根市教育委員会 2016『平成26年度 彦根市内遺跡発掘調査報告書1』彦根市埋蔵文化財調査報告書第68集

図版 1



1 調査区南半部全景〔南から〕



2 調査区北半部全景〔南から〕



1 SH01 掘削状況〔南西から〕



2 SH01 掘削状況〔北東から〕

第2章 須川遺跡（第6次）

1 遺跡の概要

須川遺跡は彦根市北部の西今町に所在する遺跡であり、犬上川の右岸に位置する。遺跡南方を流れる犬上川は、彦根市東方に位置する霊仙山系を発して西方の琵琶湖へと注いでおり、その中流域においては、堆積作用による広大な扇状地が形成されている。

須川遺跡の所在する西今町は、この扇状地の扇端部にあたることから周辺に複数の湧水地が存在し、その水は周囲の田畑を潤している。また、この地域には犬上川やその支流の旧流路によって形成された自然堤防が散在しており、遺跡は、そうした標高の高い地点に立地する傾向にある。

須川遺跡では、これまでに弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の竪穴建物や溝、平安時代の土坑、室町時代の井戸、掘立柱建物などが検出されており、一帯に各時期にわたる遺構の存在が確認されている。

今回報告する須川遺跡第6次調査は、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての時期の竪穴建物群や溝などが検出された第4次調査区の南西約80mの地点に位置しており、距離的にも比較的近いことから、第4次調査区と同様、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の遺構や遺物の検出が想定されていた。

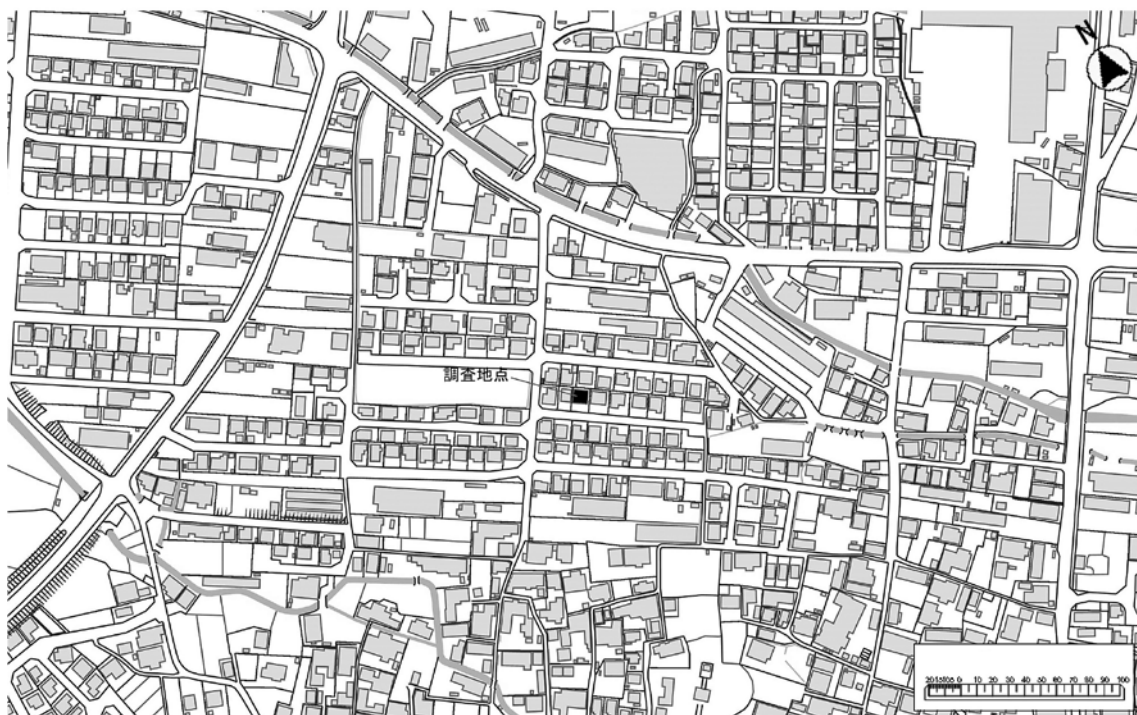


図1 調査地点位置図

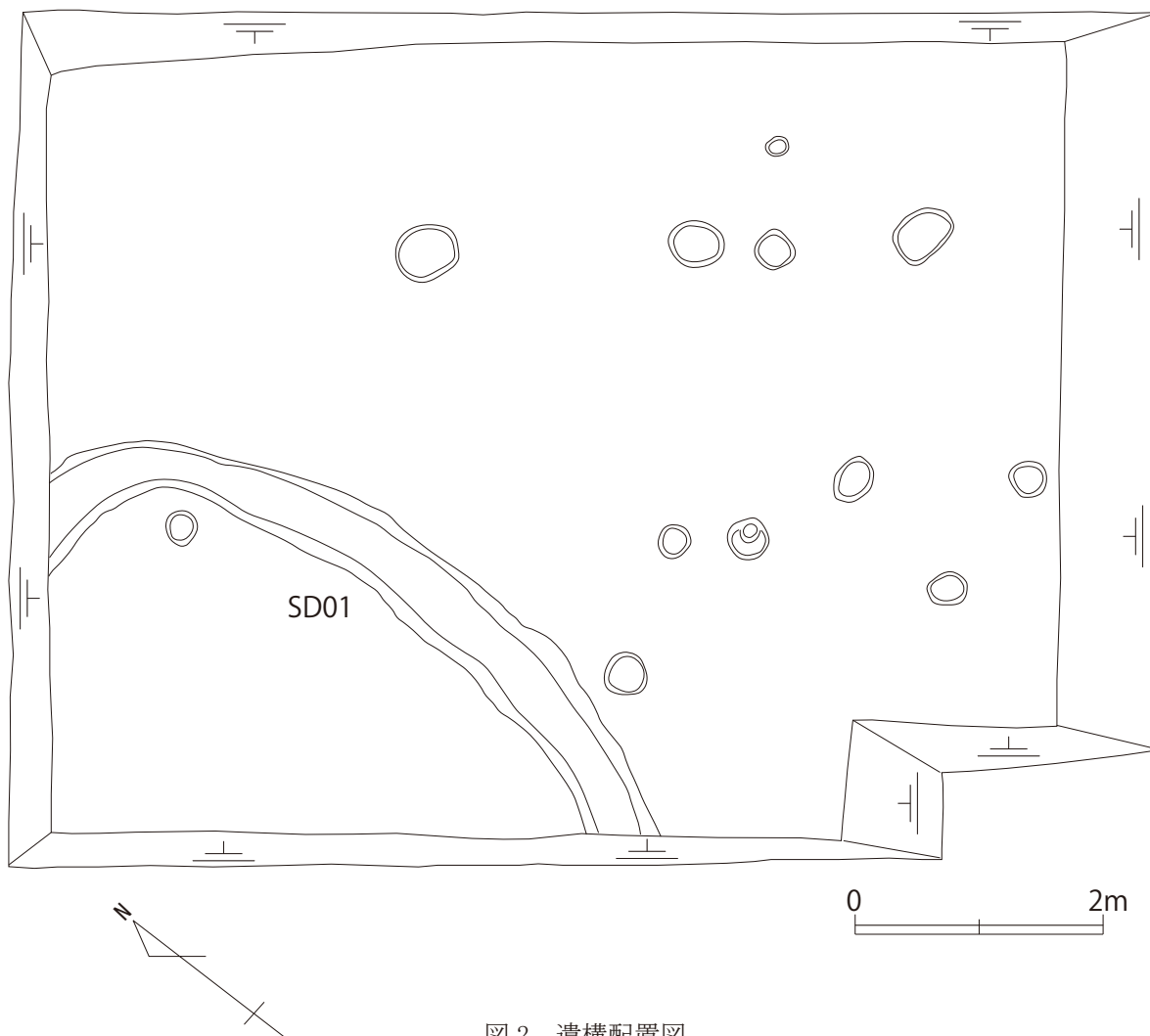


図2 遺構配置図

2 調査経過

今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴う文化財保護法第93条の届出および調査依頼に基づくものであり、宅地造成時に実施した試掘調査の結果に基づいて、地盤改良工事の影響を受ける建物部分を調査区として、平成28年10月3日から同年10月20日にかけて調査を行った。今回の調査地は彦根市西今町字大塚693番5号に位置し、調査面積は敷地面積約158.94㎡のうち、建物部分約61㎡である。調査はバックホーにより表土の掘削を行った後に、人力掘削によって遺構の検出および掘削を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の層序としては、上層から灰褐色砂礫土層（現代造成土層）、灰褐色粘質土層（旧表土）、暗灰色粘質土層（旧耕作土）、灰色粘質土層となっている。このうち灰色粘質土層の上面において遺構検出を行ったところ、現地表面から約-100cmの深度において溝、小穴等の遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

調査の結果、遺構としては溝1条、小穴群を確認した。遺物については出土していない。以下、詳細を述べる。

溝SD01は、調査区南西に位置する溝である。幅約50cm前後を測り、深さは約10cm程度を測る。調査区の北西角付近において緩やかに90°屈曲し、調査区外へと伸びる。溝の性格は不明であるが、内部空間を限るための構造の一部である可能性が考えられる。小穴群については全体で12基を数え、各々は最小で直径約20cm、最大で直径約50cmの不整形を呈するものであった。

4 総括

今回の調査では溝と小穴群を検出したが、遺物が出土していないために遺構の年代については不明である。また、小穴については規則的な配置は見受けられず、溝についても全体像が不明であるため、現状ではその性格を読み取ることはできない。このため、以下では近隣での調査成果に基づいて、いくつかの考察を加えることで、まとめとしたい。

近隣における調査成果としては、調査区の北東約80mの地点に位置する須川遺跡第4次発掘調査が挙げられる。この調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落跡の存在が明らかとなっており、竪穴建物5棟や区画溝と推定される大溝1条のほか、今回のSD01と類似する溝2条が検出されている。

第4次調査区におけるこのSD01に類似する溝は、過半が調査区外となっており、全体像は不明である。しかし、溝の両端が同一方向へと概ね90°屈曲することから、隅丸方形プランとなる遺構の隅部2カ所に該当するものと推測される。この場合、おそらく溝の内側には1辺3～4m四方程度の小規模な空間が形成されるものと考えられる。

今回の第6次調査におけるSD01については隅部1カ所のみを検出であるために確度はやや低い、第4次調査区との地点的にも近いことから、同一集落内における同様の遺構だったのではないかと推測している。

このほか、周辺部における個人住宅建設工事等に伴う試掘調査によって、第6次調査区の南側には犬上川旧流路と思われる埋没した谷地形の存在が明らかとなっている。このため、北側に位置する第4次調査区から南側に位置する第6次調査区へ向けては、緩やかな傾斜面になっていたものと推測され、第6次調査区周辺は、水辺に近い立地にあったものと推測される。

今回の第6次調査では、4次調査区において確認された弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の集落について、南側への広がりを持つことが確認できた。

参考文献

彦根市 2018『須川遺跡第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第73集



1 調査区東半部〔南から〕



2 調査区東半部〔北から〕

図版 2



1 調査区西半部〔南東から〕



2 調査区西半部〔南西から〕

第3章 福満遺跡 (第21次)

1 遺跡の概要

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。調査地が所在する西今町一帯は、彦根市の北部、犬上川右岸に位置しており、周辺には弥生時代終末から古墳時代初頭、古代、中世の集落跡である須川遺跡や、古代寺院・官衙跡として知られる竹ヶ鼻廃寺遺跡などが所在している。

福満遺跡においては、縄文時代前期末および後期・晩期の遺物を含む包含層や、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の竪穴建物、古代の掘立柱建物などが検出されている。平成25年度には民間の宅地造成工事に伴い実施した福満遺跡第12次発掘調査において、6世紀末頃の土壇墓2基が検出されており、一帯に古墳群が存在する可能性が指摘された。

その後、同造成地内においては、第13次調査において正南北に主軸を持つ8世紀代の大型の掘立柱建物が検出され、第16次調査では方形周溝墓の残滓と考えられる溝、第20次調査においてはカマドを伴う8世紀代の竪穴建物などが検出されている。

今回報告する第21次調査は、これら各調査区と同一の造成地内に位置していることから、弥生時代から古墳時代、古代にかけての遺構や遺物の検出が想定されていた。

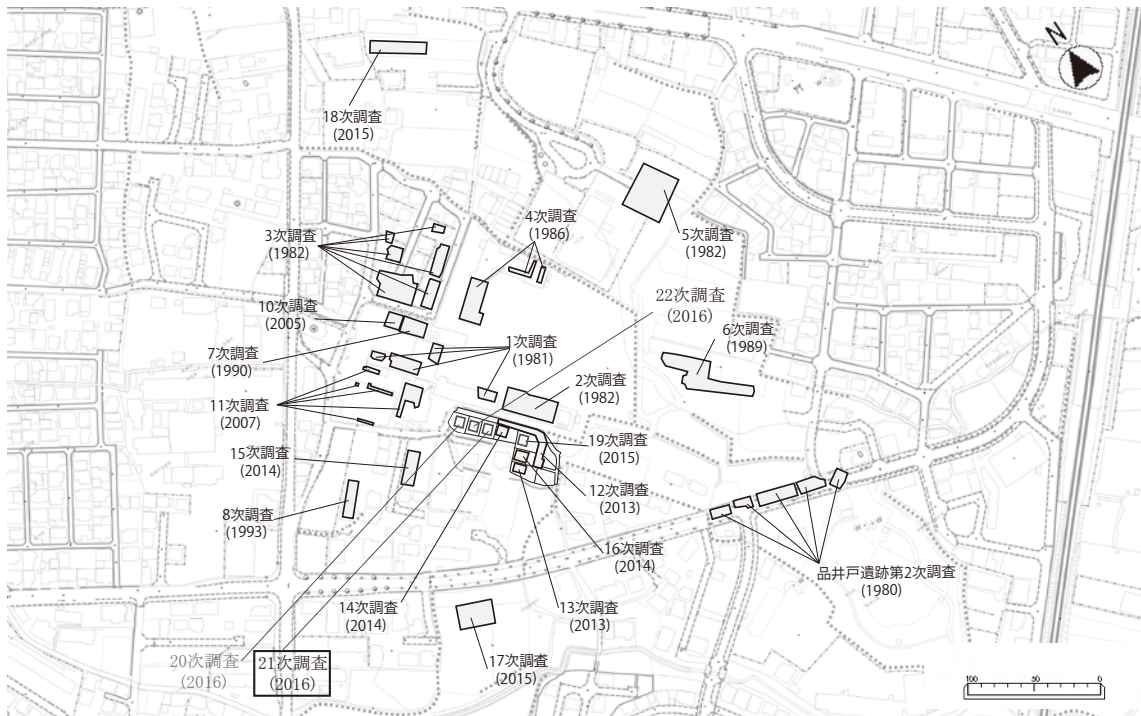


図1 調査地点位置図

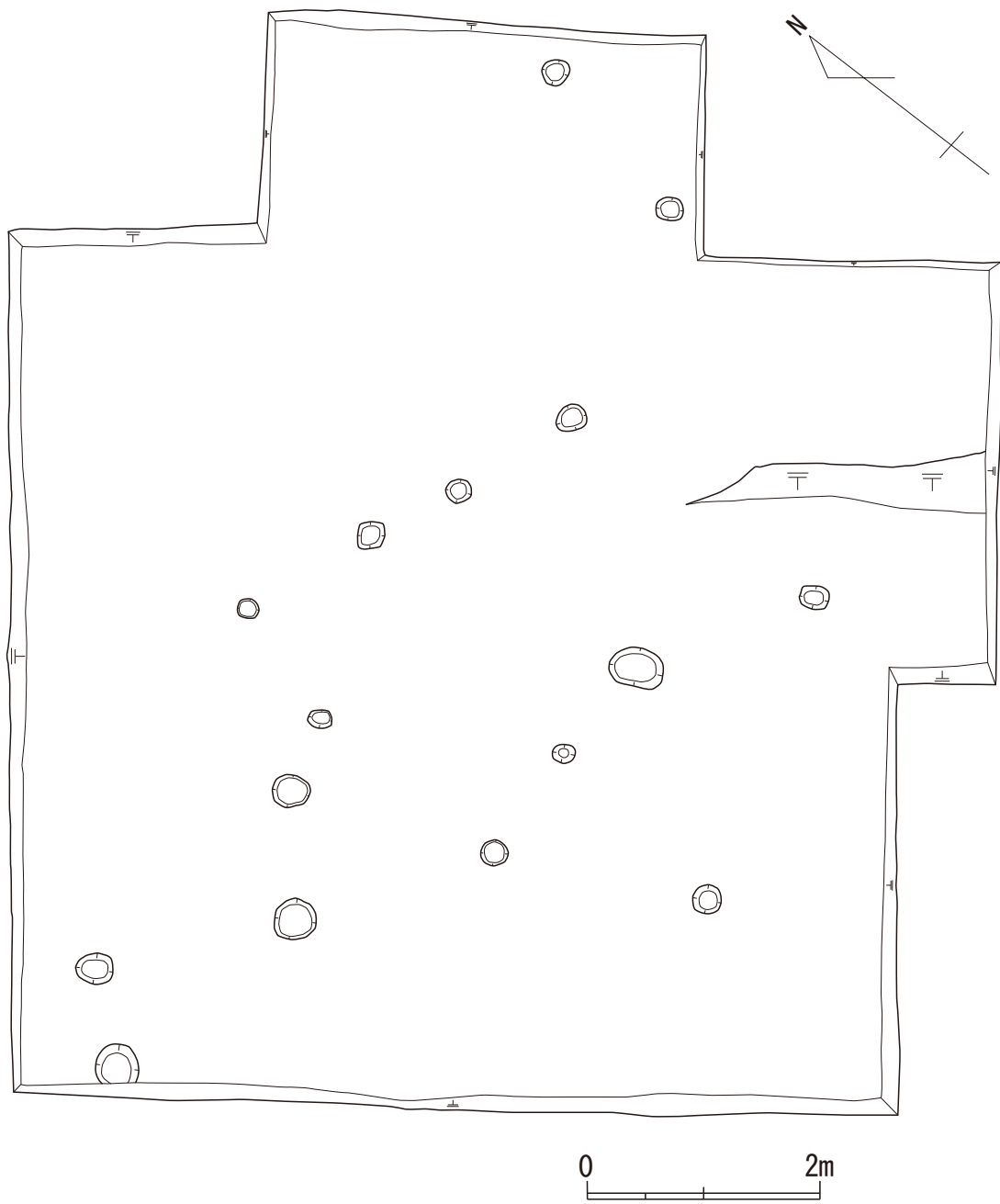


図2 遺構配置図

2 調査経過

今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴う文化財保護法第 93 条の届出及び調査依頼に基づくものであり、宅地造成時に実施した試掘調査の結果に基づいて、地盤改良工事の影響を受ける建物部分を調査区として、平成 28 年 10 月 4 日から同年 10 月 21 日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町字小橋ヶ板 298 番 2 号に位置する。調査面積は敷地面積約 151.41 m²のうち、建物部分約 70 m²である。調査はバックホーにより表土の掘削を行った後に、人力掘削によって遺構の検出および掘削を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の層序としては、上層から灰褐色砂礫土層（現代造成土層）、灰色粘質土層（近現代の耕作土層）、明黄褐色砂質土層となっている。このうち明黄褐色砂質土層の上面において遺構検出を行ったところ、現地表面 -60 cm の深度において小穴等の遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

調査の結果、遺構としては小穴群（16 基）を確認した。遺物については出土していない。以下、詳細を述べる。

小穴群については、いずれも平面不整円形を呈し、全体で 16 基を数える。規模としては最大で長軸約 40 cm×短軸約 30 cm、最小で長軸×短軸ともに約 20 cm 程度を測る。一部、直線的に並ぶように見られるため、柵列の可能性もあるが、確定はできない。

遺物はいずれの遺構からも出土しておらず年代の特定はできない。ただし、この調査区の西側に近接する福満遺跡第 20 次調査区においては 8 世紀代のカマドを伴う竪穴建物が検出されており、周囲からは今回のものと類似する小穴群が検出されている。埋土の土質も類似しているため、今回の小穴群についても同様の時期に帰属する可能性が高いと考えられる。

4 総括

今回の調査では、小穴群を検出した。西側に近接する第 20 次調査区内の竪穴建物に関わるものと見ており、年代は概ね 8 世紀代のものと推測される。当該の竪穴建物と今回の調査地とは約 20～30 m と比較的近接した距離に位置しており、建物周辺の空間利用という観点では、遺構の存在が比較的希薄な空閑地的な状況にあったことが理解される。

参考文献

- 彦根市教育委員会 2014 『平成 24 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 58 集
- 彦根市教育委員会 2015 『福満遺跡第 12 次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 59 集
- 彦根市教育委員会 2015 『平成 25 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 63 集
- 彦根市教育委員会 2019 『平成 26 年度彦根市内遺跡発掘調査報告書 2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 76 集
- 彦根市 2021 『福満遺跡第 20 次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 84 集

図版 1



1 調査区全景〔西から〕



2 調査区全景〔東から〕

第4章 福満遺跡（第22次）

1 遺跡の概要

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。調査地が所在する西今町一帯は、彦根市の北部、犬上川右岸に位置しており、周辺には弥生時代終末から古墳時代初頭、古代、中世の集落跡である須川遺跡や、古代寺院・官衙跡として知られる竹ヶ鼻廃寺遺跡などが所在している。

福満遺跡においては、縄文時代前期末および後期・晩期の遺物を含む包含層や、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期の竪穴建物、古代の掘立柱建物などが検出されている。平成25年度には民間の宅地造成工事に伴い実施した福満遺跡第12次発掘調査において6世紀末頃の土壙墓2基が検出されたことにより、一帯に古墳群が存在する可能性が指摘された。

同造成地内においては、第13次調査において正南北に主軸を持つ8世紀代の大型の掘立柱建物が検出され、第16次調査では方形周溝墓の残滓と考えられる溝、第20次調査においてはカマドを伴う8世紀代の竪穴建物、今回の調査区と隣接する第21次調査においては、第20次調査と同時期の可能性がある小穴群が検出された。

今回報告する第22次調査は、これらの各調査区と同一の造成地内に位置していることから、弥生時代から古墳時代、古代にかけての遺構や遺物の検出が想定されていた。

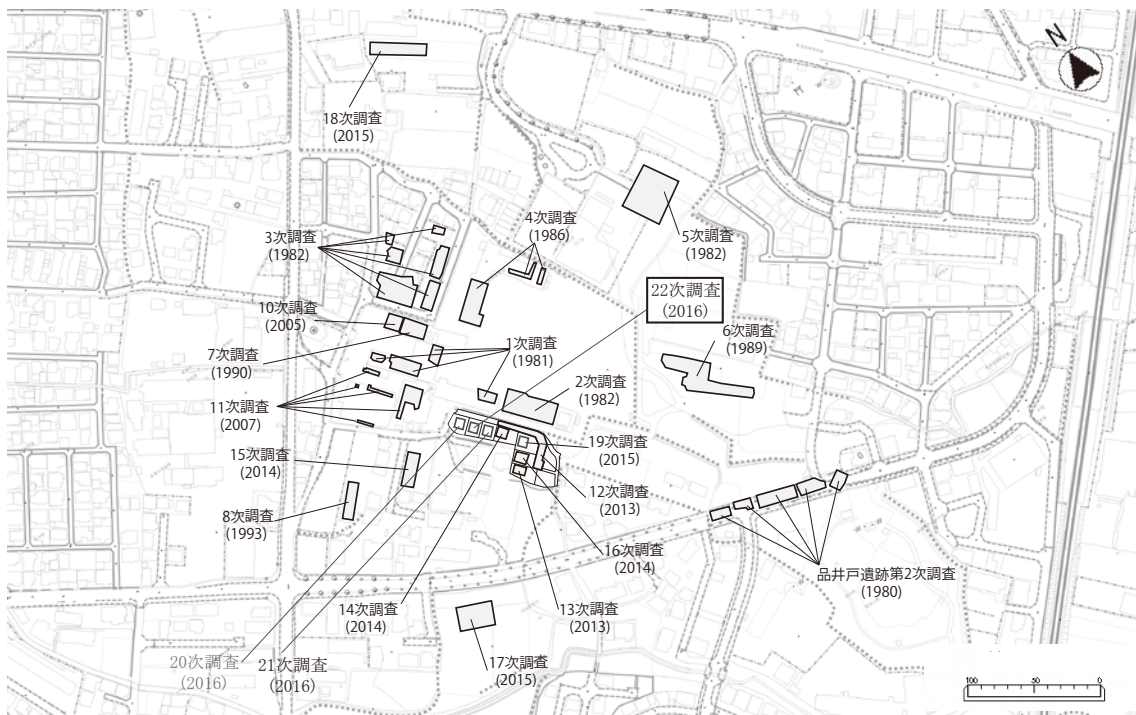


図1 調査地点位置図

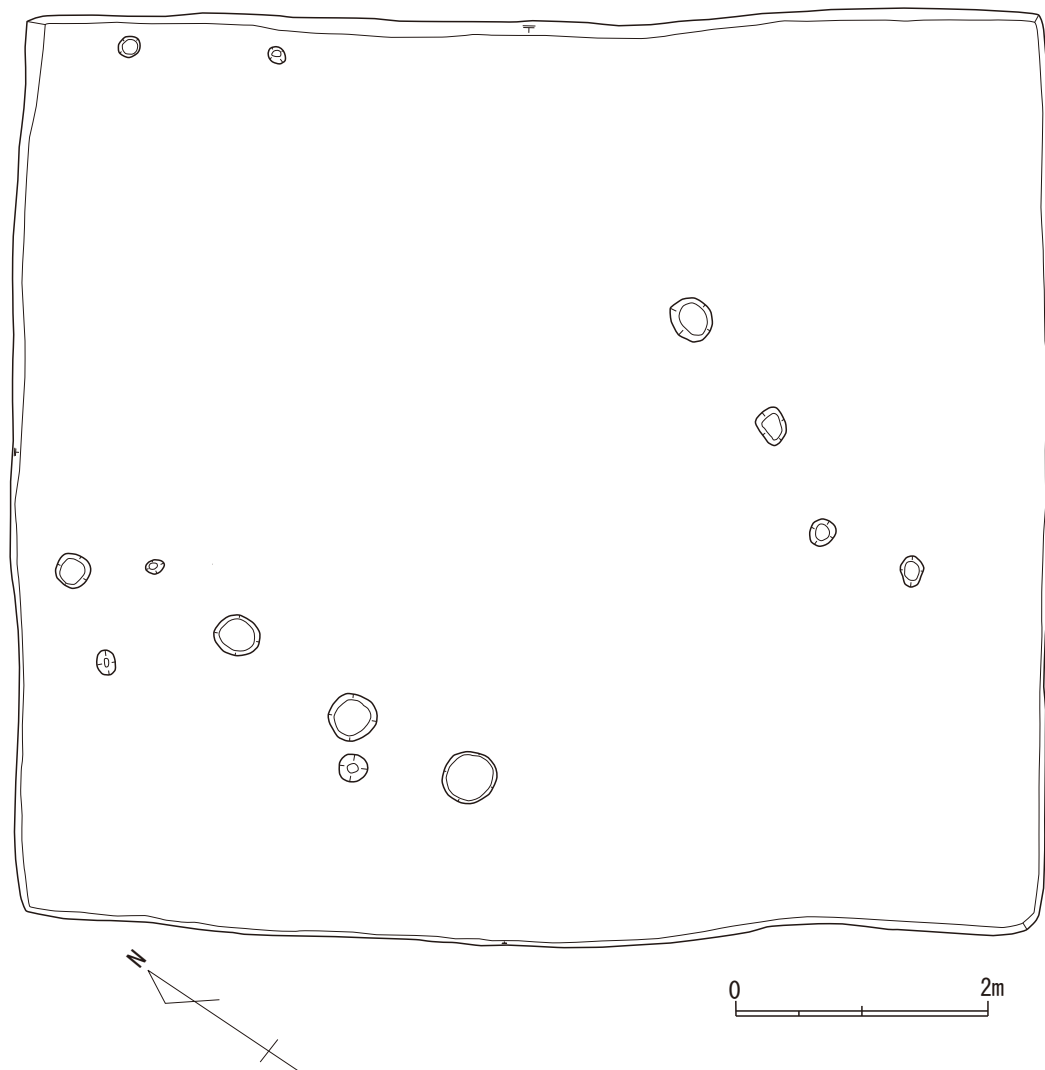


図2 遺構配置図

2 調査経過

今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくものであり、宅地造成時に実施した試掘調査の結果に基づいて、地盤改良工事の影響を受ける建物部分を調査区として、平成29年3月6日から同年3月31日にかけて調査を行った。今回の調査地は北西側に第20次、南東側に第21次の調査区が位置し、両調査区に挟まれた地点となる。彦根市西今町字小橋ヶ板298番14号に位置し、調査面積は敷地面積約150.01㎡のうち、建物部分約66㎡である。調査はバックホーにより表土の掘削を行った後に、人力掘削によって遺構の検出および掘削を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の層序としては、上層から灰褐色砂礫土層（現代造成土層）、灰色粘質土層（現代の耕作土層）、明黄褐色砂質土層となっている。このうち明黄褐色砂質土層の上面において遺構検出を行ったところ、現地表面 -60 cmの深度において小穴等の遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

調査の結果、遺構としては小穴群（13基）を確認した。遺物については出土していない。以下、詳細を述べる。

小穴群については、いずれも不整円形ないし隅丸方形の平面形状を呈し、全体で13基を数える。規模としては、最大で長軸×短軸ともに約40cm程度、最小で長軸約15cm×短軸約10cm程度を測る。一部が直線的に並ぶことから柵列となる可能性もあるが、確定はできない。

各遺構からの出土遺物は無く、構築年代は不明である。状況としては第21次調査区とほぼ同様であり、8世紀代の竪穴建物が検出された第20次調査区との距離は約10～20m程度と極めて近く、埋土の土質も類似していることから、今回の小穴群についても同様の時期に帰属するものである可能性が高いと考えられる。

4 総括

今回の調査では、小穴群を検出した。第21次調査区において検出した小穴群と同様、西側に隣接する第20次調査区内の竪穴建物と同時期、概ね8世紀代のものと推測される。

当該の竪穴建物と今回の調査地とは約10～20mほどの距離に位置しており、建物周辺の空間利用という観点では、他の構造物が存在しない、空閑地であったことが理解される。

参考文献

- 彦根市教育委員会 2014『平成24年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 彦根市教育委員会 2015『福満遺跡第12次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集
- 彦根市教育委員会 2015『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集
- 彦根市教育委員会 2019『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 彦根市 2021『福満遺跡第20次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第84集

図版 1



1 調査区西半部 完掘状況〔北東から〕



2 調査区西半部 完掘状況〔北東から〕

第5章 須川遺跡（第9次）

1 遺跡の概要

須川遺跡は、犬上川右岸に位置し、周辺では、湧水点が多く存在している。調査地点の遺構検出面の標高は91.8 mで、軟弱な粘質土からなる不安定な土質を基盤層としており、犬上川の氾濫原、あるいは後背湿地にあたりと考えられる。須川遺跡の東側には、福満遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、品井戸遺跡、西今遺跡があり、これらの遺跡は、犬上川右岸の自然堤防上に営まれたもので、その多くは縄文・弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。須川遺跡の近くでは、戦国時代には下街道が、近世には朝鮮人街道が縦貫しており、中世から近世の交通においても重要な位置を占める。今回の調査地は近年の宅地造成工事で整備された宅地の一角である。

2 調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出および調査依頼に基づくもので、須川遺跡の第9次調査である。試掘調査の結果に基づき、杭基礎工事によって遺構に影響の及ぶ建物部分を調査区として、平成30年2月13日から3月12日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市西今町地先に位置する。調査面積は約62 m²である。調査は表土掘削にはバックホーを用い、その後、人力掘削により調査を行った。



図1 調査地点位置図

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の基本層序は、第1層：黄灰色砂礫（現代造成土）、第2層：灰オリーブ色礫混じり粘質土（旧表土）、第3層：黄褐色粘質土（客土）、第4層：灰色粘質土（旧耕作土）、第5層：にぶい黄褐色粘質土（遺構面）である。遺構検出面の標高は91.8 m前後を測る。

(2) 遺構と遺物

調査区全域で遺構・遺物が検出された。主に弥生時代終末から古墳時代にかけての溝、小穴、落ち込み状遺構、中世の土坑、溝などが確認された。以下に、主要な遺構・遺物について記述する。

調査区北東壁第4層から、青磁(1)が出土している。

1は青磁の椀の口縁部である。外面には雷文が施されている。

SK1 調査区の南東端部で検出された土坑である。調査区端にかかるため全形は確認できない。検出部の長辺約0.84 m、短辺約0.55 m、深さ約0.14 mを測る。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP2 調査区の南東端部で検出された小穴である。平面形は楕円形で、長辺約0.32 m、短辺約0.17 m、深さ約0.10 mを測る。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SX3 調査区の南側で検出された落ち込み状の遺構である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、検出部の長辺約3.30 m、短辺約2.71 m、深さ約0.14 mを測る。埋土は、1層：黄灰色粘質土、2層：暗灰黄色粘質土の2層である。炉跡の可能性もある焼土層も確認されることより、竪穴建物の可能性も考えられる。

遺物は、土師器(2)と須恵器(3)が出土した。

2は土師器の高杯の口縁部で、口径は17.0 cmを測る。3は須恵器の高杯の脚部で底径は9.0 cmを測る。

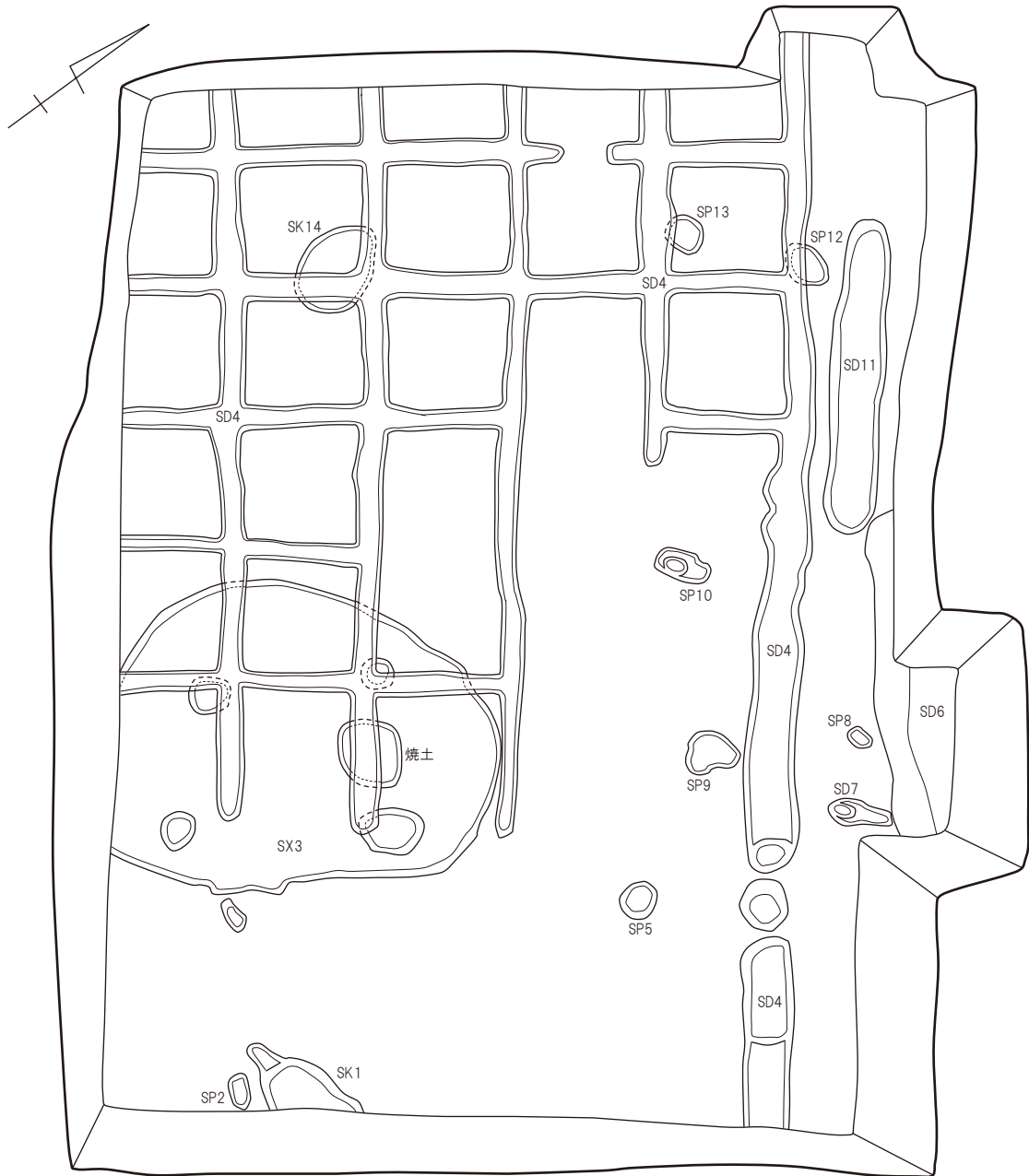
SD4 調査区全域に広がる格子目状の素掘り溝である。南北方向の溝の軸方位はN-34°-Eで犬上郡条里地割に乗っている。幅0.14～0.42 m、深さ0.05～0.12 mで断面U字状を呈する耕作に伴う素掘り溝と考えられる。埋土は、灰色粘質土の1層である。

遺物は、山茶碗(4)と土師器(5)が出土した。

4は山茶碗の小碗で口径15.4 cm、底部径7.2 cm、器高4.7 cmを測る。5は土師器の羽釜で、内湾する口縁を有し、口径15.6 cmを測る。端部より2 cm下に断面三角形の鏝を貼り巡らせており、内面はハケ調整が施されている。いずれも12世紀後半頃のものと考えられる。

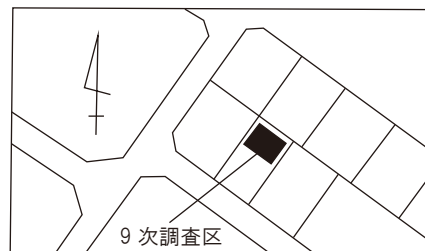
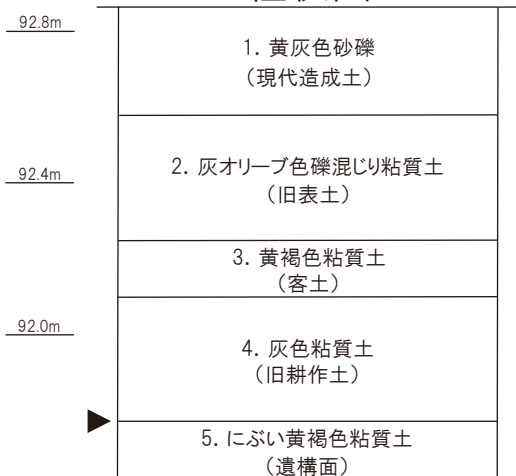
SP5 調査区の東側で検出された小穴である。平面形は円形で、長辺約0.34 m、短辺約0.28 m、深さ約0.27 mを測る。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。



▲ 柱状図位置

柱状図



▶ : 遺構検出面

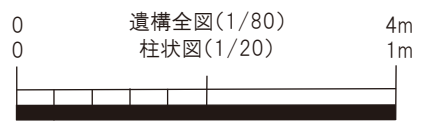


図2 遺構全図・基本層序

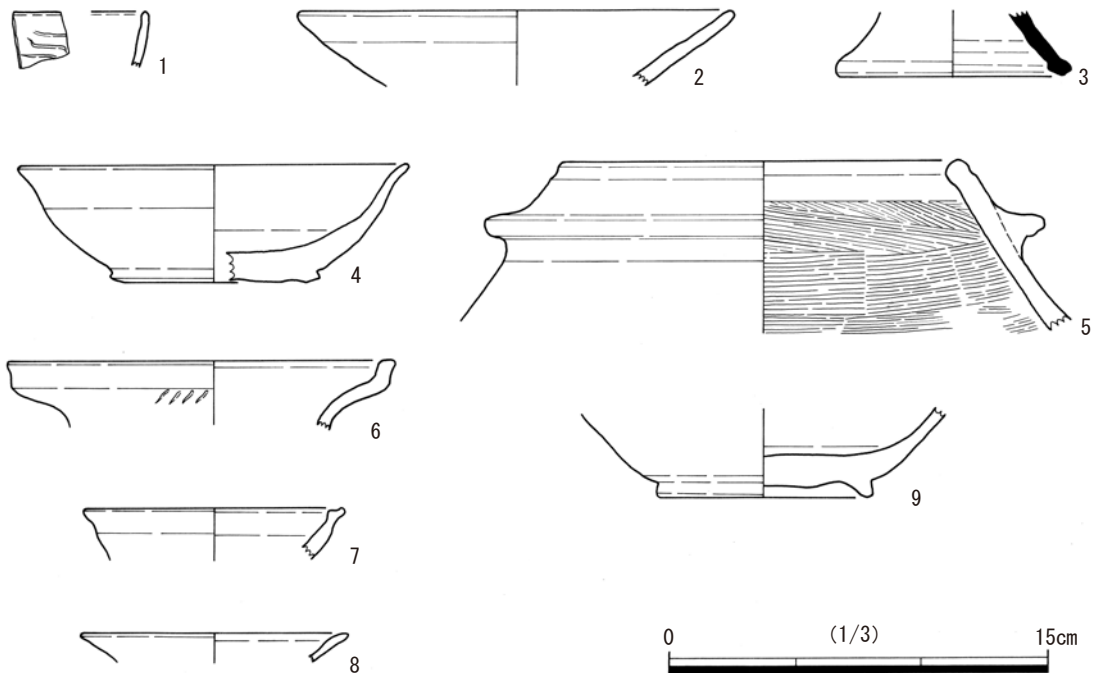


図3 出土遺物実測図

表1 出土遺物一覧

掲載 No.	出土地点	器種	器形	部位	残存率	法量 (cm)				胎土	焼成	色調		備考			
						口径 (長さ)	最大径 (幅)	底部径 (厚さ)	器高			外面	内面				
1	北東壁	4層	青磁	碗	口縁部	10%未着	—	—	(2.2)	緻密	硬	10GY	6/1緑灰色	10GY	6/1緑灰色	外面口縁部付近に雷文	
2	SX3		土師器	高杯	口縁部～杯部	10%未着	17.0	—	—	(3.0)	密	やや硬	7.5YR	8/3淡黄橙	7.5YR	8/4淡黄橙	胎土・砂粒を多く含む
3	SX3		須恵器	有蓋短脚高杯	杯部～底部	10%未着	—	—	9.0	(2.6)	密	硬	N	7/0灰	N	7/0灰	
4	SD4		山茶碗	小碗	口縁部～底部	20%	15.4	—	7.2	4.7	緻密	硬	N	8/0灰白	N	8/0灰白	内面に墨?が付着
5	SD4		土師器	羽釜	口縁部	10%未着	15.6	—	—	(6.7)	密	10R	6/8赤橙	10R	6/6赤橙		
6	SD6	2層	弥生土器	壺	口縁部	10%未着	14.2	—	—	(2.5)	緻密	硬	7.5YR	8/3淡黄橙	7.5YR	8/3淡黄橙	
7	SD6	1層	土師器	不明	口縁部	10%未着	10.2	—	—	(2.0)	緻密	硬	7.5YR	8/1灰白	7.5YR	8/2灰白	
8	SD7		土師器	皿	口縁部	10%未着	10.6	—	—	(1.2)	緻密	硬	5YR	7/6橙	5YR	7/6橙	内面に墨が付着
9	SK14		山茶碗	碗	杯部～底部	20%	—	—	8.6	(3.5)	密	硬	N	8/0灰白	N	8/0灰白	内面に墨?が付着

SD6 調査区北東端部で検出された溝である。調査区端にかかるため全景は確認できないが、検出部の長さ約 2.84 m、幅約 0.70 m、深さ約 0.59 m で断面台形状を呈する。埋土は、1層：褐灰色粘質土、2層：黒褐色砂混じり粘質土、3層：黄灰色粘質土の3層である。

遺物は、弥生土器（6）と土師器（7）が出土した。

6は弥生土器の受口壺で口径 14.2 cm を測る。第2口縁外面下端に刺突文を施す。

SD7 調査区北東側で検出された溝である。長さ約 0.55 m、幅約 0.23 m、深さ約 0.11 m で断面U字状を呈する。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、土師器（8）が出土した。

8は、土師器の皿で口径 10.6 cm を測る。内面口縁部に煤が付着していることより灯明皿と考えられる。

SP8 調査区の北東側で検出された小穴である。平面形は楕円形で、長辺約 0.23 m、短辺約 0.13 m、深さ約 0.14 m を測る。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP9 調査区の北東側で検出された小穴である。平面形は不整形で、長辺約 4.3 m、短辺約 3.8 m、深さ約 0.11 m を測る。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は出土していない。

SP10 調査区の中央付近で検出された小穴である。平面形は楕円形で、長辺約 0.48 m、短辺約 0.24 m、深さ約 0.18 mを測る。埋土は、褐灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD11 調査区北側で検出された溝である。長さ約 2.73 m、幅約 0.43 m、深さ約 0.17 mで断面U字状を呈する。埋土は、黄灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SP12 調査区の北側で検出された小穴である。SD4 に切られているが、平面形は楕円形で、長辺約 0.43 m、短辺約 0.28 m、深さ約 0.30 mを測る。埋土は、黄灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SP13 調査区の北側で検出された小穴である。SD4 に切られているが、平面形は円形で、長辺約 0.31 m、短辺約 0.27 m、深さ約 0.10 mを測る。埋土は、黄灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK14 調査区の西側で検出された土坑である。平面形は楕円形で、長辺約 0.82 m、短辺約 0.64 m、深さ約 0.32 mを測る。埋土は、褐灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、山茶碗 (9) が出土した。

9 は、山茶碗の碗で底部径は 8.6 cmを測る。内面に煤が付着している。12 世紀後半頃のものと考えられる。

4 総括

今回の調査では、弥生時代終末から古墳時代にかけての時期の溝、小穴、竪穴建物と推定される落ち込み状遺構など集落関連の遺構と、中世の格子目状に広がる耕作に伴う素掘り溝が確認された。

弥生時代終末から古墳時代にかけての遺構は、本調査地から北東方向に約 70 m離れた 4・7・8・10 次調査でも確認されており、一連の集落に関わるものの可能性が考えられる。

中世の犬上郡条里地割と方位軸を同じくする格子目状の素掘り溝は、須川遺跡第 10 次調査や一ツヤ遺跡第 2 次調査、山之脇遺跡第 2 次調査でも検出されており、市内で広がりがあるが確認されつつある。ただ、いずれの事例も出土遺物が極めて少ないため、時期の特定が困難であるが、今回の調査では 12 世紀後半の遺物が 2 点確認された。

今後は、須川遺跡における弥生時代終末から古墳時代の居住域としての集落の広がりや耕作域の確認、中世の格子目状に広がる耕作に伴う素掘り溝の広がりや時期の絞り込みなどが課題となっていくと考えられるが、それは今後の周辺調査の進展に委ねたい。

参考文献

彦根市 2023『彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第 89 集

図版 1



1 調査前風景〔北西より〕



2 東調査区全景〔南西より〕



1 中央調査区全景〔南西より〕



2 西調査区全景〔南西より〕

図版 3



1 南東壁土層断面〔西より〕



2 溝 (SD6) 完掘状況〔南西より〕



1 落ち込み状遺構 (SX3) 検出状況 [北西より]

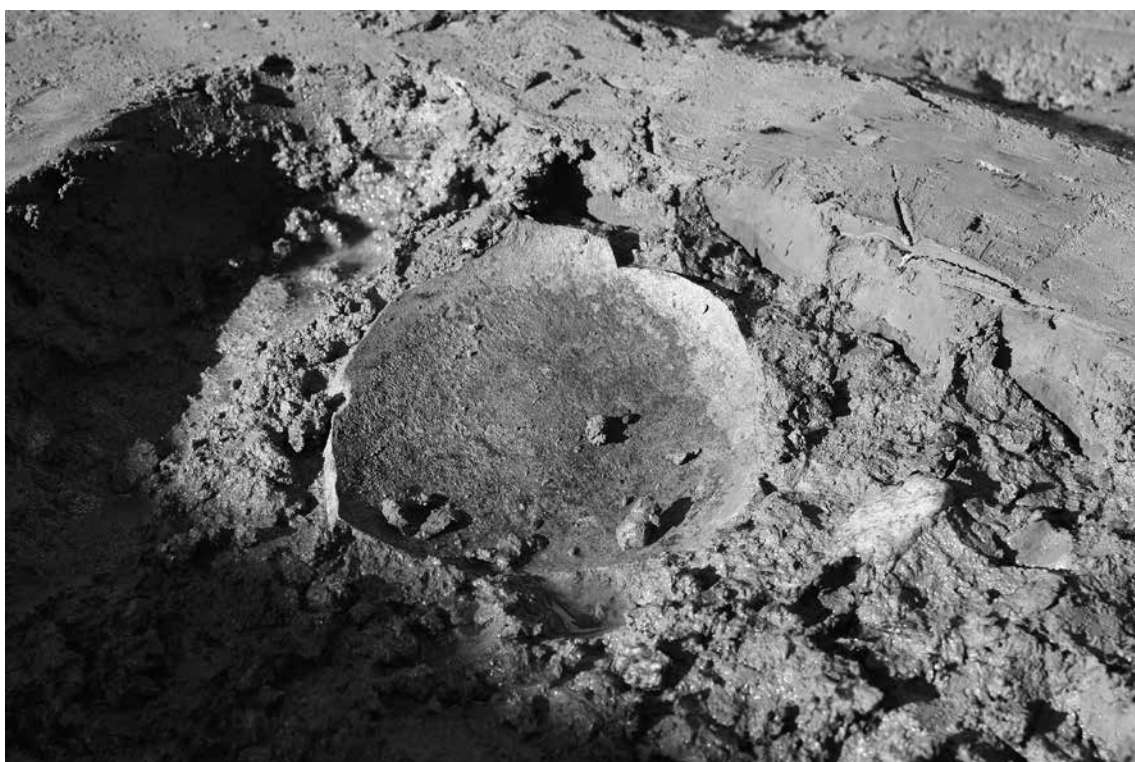


2 落ち込み状遺構 (SX3) 完掘状況 [北西より]

図版 5



1 落ち込み状遺構（SX3）内の焼土層検出状況〔北西より〕



2 土坑（SK14）遺物出土状況〔西より〕



1 格子状の素掘り溝（SD4）検出状況〔南西より〕

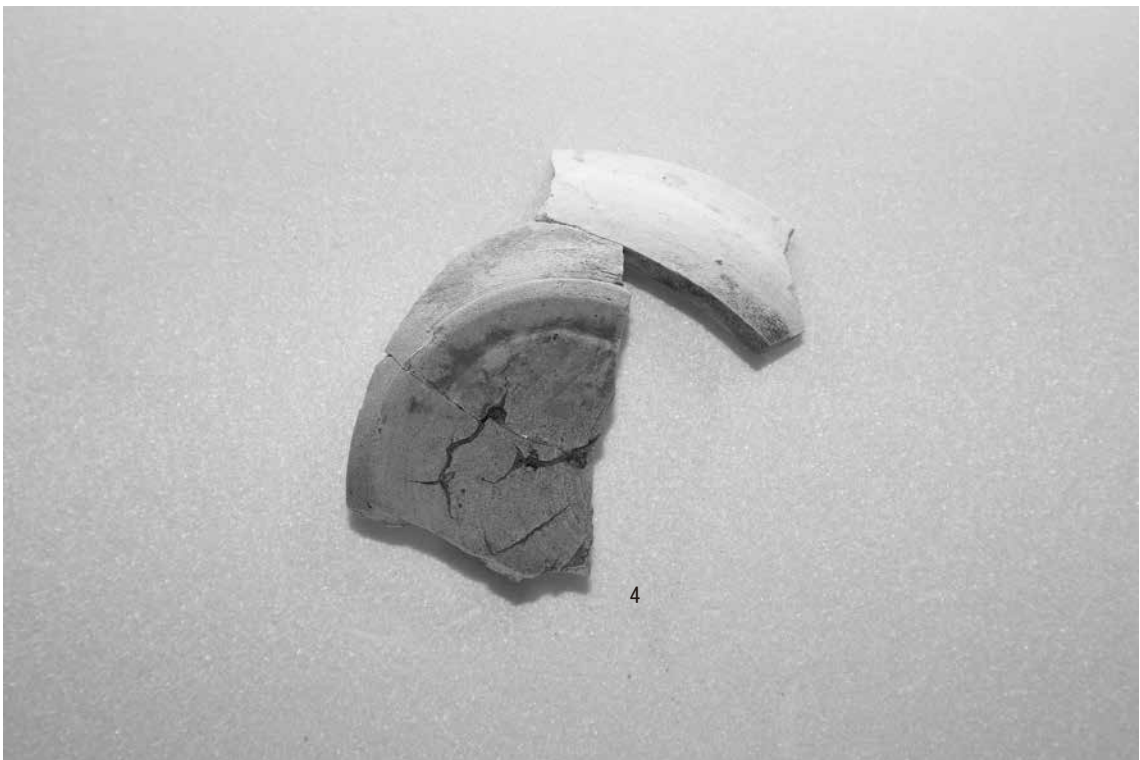


2 格子状の素掘り溝（SD4）完掘状況〔北東より〕

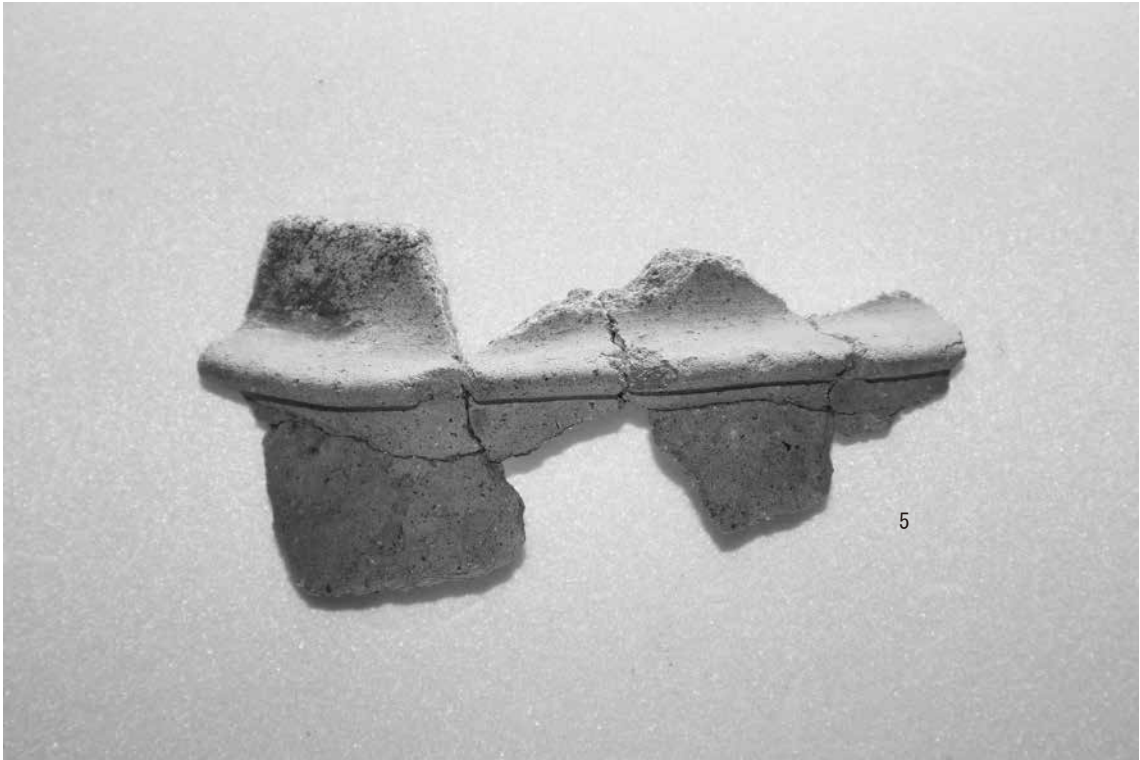
图版 7



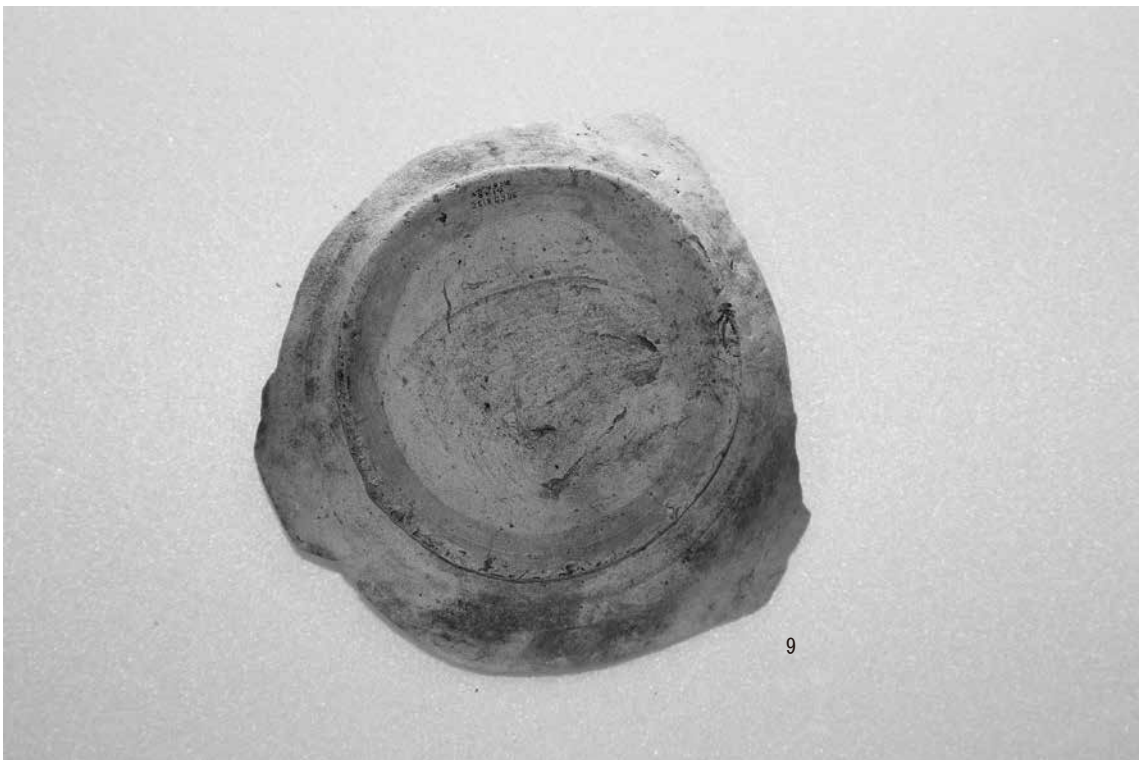
1 出土遺物



2 出土遺物



1 出土遺物



2 出土遺物

第6章 丁田遺跡（第11次）

1 遺跡の概要

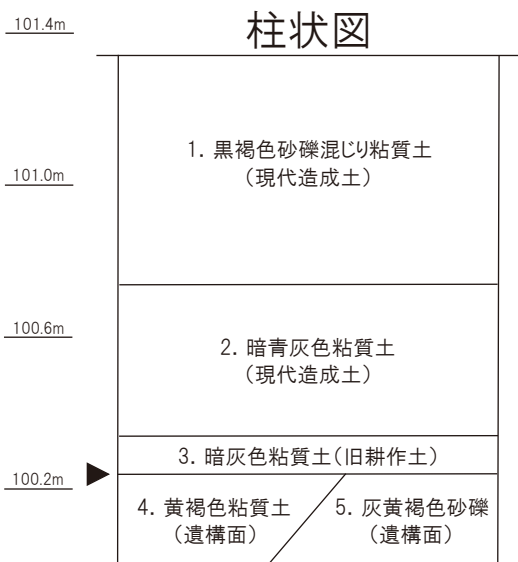
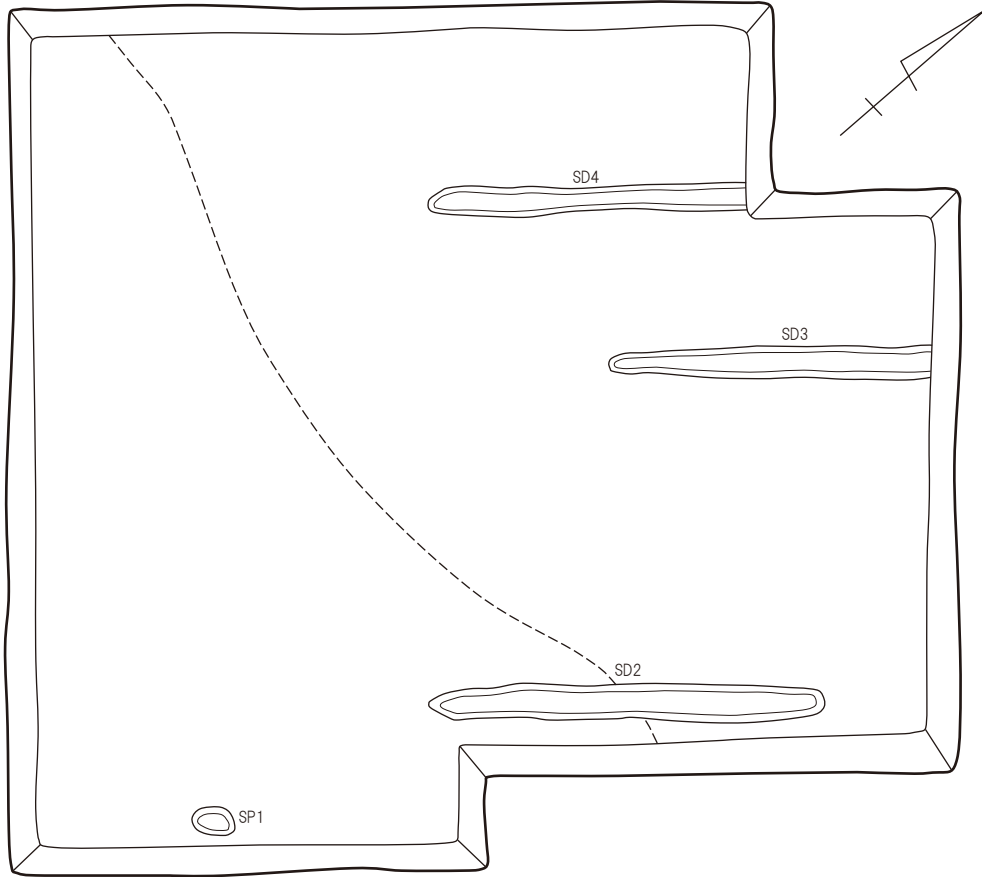
丁田遺跡の位置する高宮町は、彦根市のほぼ中央に位置し、南東から北西に流れる犬上川の右岸に所在する。犬上川は、河岸段丘を形成しながら犬上郡多賀町の檜崎周辺を扇頂として西北方向に扇を広げるように広がる扇状地を形成する。このために川水の浸透が著しく、小河川は伏流し平常時は表面に水流が見られず、降雨時のみ水流の見られる水無川となる。犬上川扇状地の場合、標高約100mから95m付近が湧水ラインで、伏流水が自噴するという典型的な扇状地地形を形成している。今回の調査地も例外ではなく地理的に上位に位置する南方に複数の湧水が見られ、水田は豊富な水量に恵まれている。丁田遺跡の北西側には、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡、福満遺跡があり、これらの遺跡は犬上川右岸の自然堤防上に営まれたもので、その多くは縄文・弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

丁田遺跡では、これまで10次にわたる発掘調査が行われてきた。これらの調査の中では、縄文時代中期末の竪穴建物や埋設土器、奈良時代末から平安時代初頭にかけての掘立柱建物などが検出されている。中でも、第2次調査では縄文時代中期末の埋設土器の内部から翡翠大珠が出土しており、翡翠の原産地である糸魚川流域など、北陸地域との交流を考える上で貴重な資料となっている。



図1 調査地点位置図

▼ 柱状図位置



▶: 遺構検出面

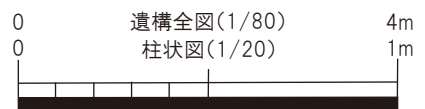
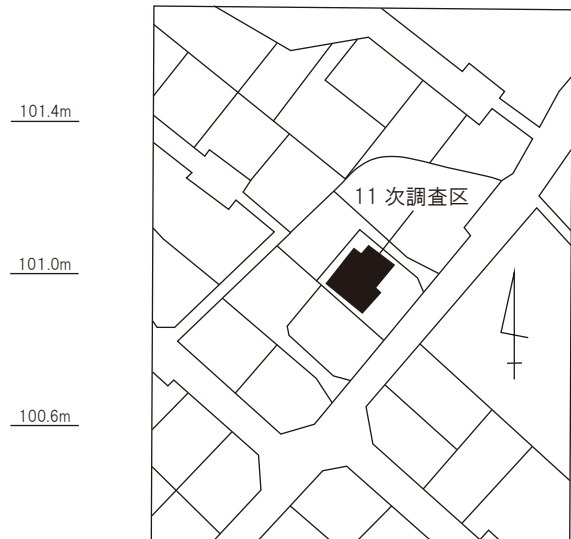


図2 遺構全図・基本層序

2 調査経過

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出および調査依頼に基づくもので、丁田遺跡の第11次調査である。試掘調査の結果に基づき、地盤改良工事によって遺構に影響の及ぶ建物部分を調査区として、令和2年3月9日から3月30日にかけて調査を行った。調査地は、彦根市高宮町字樋ノ詰1650番9に位置する。調査面積は65㎡である。調査は表土掘削にはバックホーを用い、その後、人力掘削により調査を行った。

3 調査成果

(1) 基本層位

調査区の基本層序は、上層から、第1層:黒褐色砂礫混じり粘質土(現代造成土)、第2層:暗青灰色粘質土(現代造成土)、第3層:暗灰色粘質土(旧耕作土)、第4層:黄褐色粘土(遺構面)、第5層:灰黄褐色砂礫(遺構面)である。遺構検出面の標高は100.2m前後を測る。

(2) 遺構と遺物

本調査区の遺構密度は希薄で、3条の溝と小穴のみの検出であった。

SD2～SD4の3状の溝は、いずれも軸方位をN-40°-Eに向ける素掘り溝で、幅約0.36mで断面U字状を呈す。埋土は褐灰色粘質土の1層である。いずれも遺物の出土はない。

4 総括

今回の調査では、3条の溝と小穴のみの検出であった。遺物も確認されなかったため、遺構の時期や性格の詳細な特定は困難である。ただ、3条の溝はいずれも軸方位をN-40°-Eに向けており、隣接地で実施された第2次調査で検出されたSD7と軸方位を同じくしている。このことより、3条の溝と第2次調査のSD7が一連のものと推定できるならば、今回の調査で検出された遺構群は、10世紀代の耕作地に伴う遺構の可能性はあるが詳細な検討は、今後の周辺調査の進展に委ねたい。

参考文献

彦根市教育委員会 2014『丁田遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第57集



1 調査前風景〔南東より〕



2 北西調査区全景〔南東より〕

図版 2



1 南調査区全景〔北西より〕



2 北東調査区全景〔南東より〕



1 北西壁土層断面〔南東より〕



2 溝 (SD1・2・3) 完掘状況〔南西より〕

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひこねしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	彦根市内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第90集							
編著者名	田中良輔・林 昭男							
編集機関	彦根市観光文化戦略部 文化財課							
所在地	〒522-8501 彦根市元町4番2号 TEL 0749-26-5833							
発行年月日	20240329							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
ちょうだいせき 丁田遺跡 (第9次)	ひこねし 彦根市 たかみやちょう 高宮町	252026	202- 139	35度 14分 26秒	136度 15分 06秒	124 m ³	20160912 ～ 20160930	個人住宅
すがわいせき 須川遺跡 (第6次)	ひこねし 彦根市 にしいまちょう 西今町	252026	202- 018	35度 14分 54秒	136度 14分 15秒	61 m ³	20161003 ～ 20161020	個人住宅
ふくみついせき 福満遺跡 (第21次)	ひこねし 彦根市 にしいまちょう 西今町	252026	202- 015	35度 14分 51秒	136度 14分 35秒	70 m ³	20161004 ～ 20161021	個人住宅
ふくみついせき 福満遺跡 (第22次)	ひこねし 彦根市 にしいまちょう 西今町	252026	202- 015	35度 14分 51秒	136度 14分 35秒	66 m ³	20170306 ～ 20170331	個人住宅
すがわいせき 須川遺跡 (第9次)	ひこねし 彦根市 にしいまちょう 西今町	252026	202- 018	35度 14分 54秒	136度 14分 15秒	62 m ³	20180213 ～ 20180312	個人住宅
ちょうだいせき 丁田遺跡 (第11次)	ひこねし 彦根市 たかみやちょう 高宮町	252026	202- 139	35度 14分 24秒	136度 15分 12秒	65 m ³	20200309 ～ 20200330	個人住宅

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構・遺物	特記事項
丁田遺跡 (第 9 次)	集落	縄文時代、中世	竪穴建物・小穴・耕作溝 須恵器	
須川遺跡 (第 6 次)	集落	弥生時代終末～ 古墳時代	溝・小穴	
福満遺跡 (第 21 次)	集落	古墳時代	小穴	
福満遺跡 (第 22 次)	集落	古墳時代	小穴	
須川遺跡 (第 9 次)	集落	弥生時代終末～ 古墳時代、中世	竪穴建物・小穴・耕作溝 弥生土器・土師器・須恵 器・青磁・山茶碗	犬上郡条里地割と方位軸 を同じくする格子状の素 掘り溝から山茶碗出土
丁田遺跡 (第 11 次)	集落	奈良時代	溝・小穴	

彦根市埋蔵文化財調査報告書第90集
彦根市内遺跡発掘調査報告書

令和6年(2024年)3月29日発行

編集・発行：彦根市観光文化戦略部文化財課
彦根市元町4番2号
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：株式会社デジ・プリント滋賀
滋賀県彦根市平田町776-1

HIKONE CITY EXCAVATION REPORT

SUGAWA SITE 6th and 9th

CHODA SITE 9th and 11th

FUKUMITSU SITE 21th and 22th

2024